候のために妨げられて時機を失したのは殘念であつた。
終りにのぞん吾が部のために盡力せられし諸氏の勞に對しあつく謝意を表す。

大正元年役員及部員如左

部長　野々口勝太郎、
師範　加藤眞雄、
助手　青木市郎、細川隆志、佐藤清熊、岡本糺、
委員　犬塚赫夫、木谷義英、
部員　宇木甫、高析茂、渡邊一郎、濱田彌三郎、古賀敬藏、内田益城、原田恭介、櫛崎敏夫、影浦尙親、野中嗣雄、江島秀、古川俊勝、峯六郎、樋渡肥佐雄、町野一、張管雄、藤山清、篠田重惠、粟屋靜、川野浩、江口勢太、土岐政夫、小野龍一、池田東洋、神崎勝久、川上英雄、中村德之、大野謙次郎、政木守之、柴田官一、中山廉、池上龍雄、坂田靜夫、石川豐記、松隈國健、古城辰眞　原　撰、肥後丈夫、渡邊毅、辻誠助、

雜報

龍南會委員移動

都合の爲め去る二月七日龍南會委員中左の諸君辭任せらる。

總務部　山本龜市　松井淺市
演說部　長船義熊
雜誌部　湯川蜻洋　高安三次
劍道部　山下雅實
柔道部　中村政記
野球部　堀川俊夫
庭球部　古賀龍雄　原源六
端艇部　行本多賀藏
水泳部　正成人　犬塚赫夫

右補缺として新に職に就かれしは

總務部　土岐政夫　長尾恒介
演說部　宮田正明
雜誌部　下林一之　城戸甚次郎
劍道部　竹下武雄
柔道部　原薰治
野球部　熊谷覺行
庭球部　橋本寛一
水泳部　山崎賢興
　　山田福治　鹽足武

龍南會委員改選

二月十日於端邦館龍南會委員改選あり其の結果左の如し。

總務部	立花定	中村能一	
演說部	津田元一	松岡英介	
雜誌部	島剛	德永信愛	
田邊方亮	松延彌三郎		
劍道部	河野勉	大槻誠也	
柔道部	江島秀	田中敏三	
弓術部	熊谷覺行	和田勤一郎	
野球部	三戸豐吉	勝部辰雄	
庭球部	橋本寛一	今村四郎	
端艇部	佐藤信義	室本豐次	
水泳部	天春昌次	石井正巳	
檜崎敏夫	右川俊勝		

發火演習記事

一般方略

北軍ハ博多灣ニ上陸シ又其一部ハ伊万里灣ニ上陸ヲ開始セリ南軍ノ主力ハ熊本附近ニ集合シ其一兵團ハ久留米方面ニ行進中ナリ

第一日(十一月十一日) 熊本—久留米

曉天聲あり。何の聲ぞ。早晨影あり。何の影ぞ。聲の言ふや『吾能く奮鬪勇戰せん』と。影の趨くや皆上熊本停車場。

時しも、秋老ゆること既に深ければ、拂曉の奇寒は凛々として肌骨に徹し、心裡の腥風これが爲めに益々躍る。

あゝ今日や、筑紫の野硝煙に蓋はれむ。鮮血流れて大河とならん哉。喊聲は轟いて迅雷とならん哉。

午前七時三十分、汽車は將卒を懷き徐ろに驛を發つ。見送る人と送らるゝ人、諸先生方と出征軍人、共に涙無くて口邊笑を含みしは、先づ瑞祥の瑞なるか。午前十一時、羽犬塚停車場に於て軍隊の輸送完く終り、南北兩軍相前後して八女中學に入る。校庭

に該校生の迎ふるあり。晝食。

北軍先發して陣地に據らんとし、午後一時校庭を出づ。其の陣する處下廣川村藤田にして、御野立山の麓一帶なり。丘上天滿祠あり、花崗に刻んで曰く『大元帥陛下駐蹕之碑』と。

想　定(北軍第一日)

久留米平地ヲ占領シ軍ノ筑後川ノ渡河ヲ容易ナラシムベキ任務ヲ有スル北軍前遣兵團ハ高良臺演習地附近ノ陣地ヲ占領スルニ決シ右側警戒ノ爲メ一支隊ヲ天滿宮附近ニ派遣ス

此支隊ハ十一月十一日午前十一時卅分天滿宮ニ達シタルトキ左ノ狀況ヲ知ル

一、兵力未詳ノ敵ノ一縱隊ハ十一月十一日午前十一時羽犬塚ヲ通過シ北進セリ

支隊ノ編組

歩兵第一大隊

機關銃二挺ヲ附ス

騎兵小隊(假想)

野砲兵中隊

工兵小隊(假想)

注　意

敵ハ帽ニ白布ヲ附ス

砲兵中隊砲車廿五門を挽いて丘上に登り、平野を瞰視して發彈の準備成れり。時既に南軍北上して放つ所の斥候北軍のそれと相會し、戰端茲に開かれぬ。南軍一小隊を遣出して早急敵地を得んとし北軍の彈丸を受くること甚しく、機漸く熟して戰酣となる。南軍敵の散兵線に對抗して散開し、戰線頗る大なり。兩軍の大砲機關銃絶にず援護射擊をなす。砲聲殷々紫電閃々風伯驚愕し霹靂耳を掩ふもに堪へず。眞にまのあたり修羅の巷を現出せり。接戰稍久しくして漸く兩軍突擊に移り、喊聲天を搖り肉薄戰となる。折しもあれ。名殘惜しき休戰喇叭の音地に起り、貔貅皆戈を收めて原頭に會す。

櫨木山にたける統監藤本中佐の講評。

かくて兩軍二里をひろひて久留米に入る。苧扱川町七丁目の五高歡迎大綠門(明善校寄附)を潛りてより、明善校生我軍を出迎へて整列す。嘲嘵たる音樂隊(筑後新聞社寄附)を先頭とし、隊伍整々として市街を過ぐれば、軒頭國旗を揭げて翻々たり。明善校

に入る。行宮所を拜觀するに、木立をかしく砂白うして清楚限りなし。只思ひ出さるゝは先帝の御事にて、自ら暗涙に咽び征衣濡れたり。校庭に於て大歡迎會開かる。

移動新聞社の從軍記者團、陣中日報を續刊して大活躍を始め、大輪轉機、人少きまゝに逆旅の女將應援す。

今宵はこれ出征の第一夜、激戰に疲勞せしを以て早く帳幕に眠る。夢故山に通ふあり猶戰ふもあり。

第二日(十一月十二日)　久留米ー二日市

午前八時、兩軍假營を疊みて久留米市を棄つ。歡送亦甚だ盛なり。煙火幾發か中天に爆る。今日六里の風紀强行軍。觀戰文武官の汽車に賴るもの稍多し。足つき各異樣なり。大正ワラジ不評判。道中、秋風颯々として軍容自ら堂々たり。太陽和煦の光を投げて旅情を慰むるか。木山口にて晝食し、原田を經て四時二日市に著く。(記者は汽車にて既に武藏温泉にあり。四足面目を眞黑にして日報印刷に孜々たり。)寥莫たる町、俄にどよめきて賑しく、温泉湯壺狹けれど勞を犒ふにはなほ足れり。或は戰中の閑を偸みて太宰府に觀楓し、或は明月に逍遙して菅家一千載の古を偲ぶ。都府樓既に瓦色の見るなけれども、觀音寺梵鐘の依然として響くあり。征衣の袖を片敷きて、空明に浮ぶ天拜寶滿の兩山を眺むれば、胸中感去り感又來り、悲愴なるが如く、愉快なるが如く、懷しきが如く、されど恨めしきが如し。(山下雅實記)

第三日(十一月十三日)　二日市ー福岡

十二疊の狹苦しい室に薩摩芋ぢやあるまいした休み下さいなんて動物虐待にも程があらあ、と、揃ひも揃つた大男連の審判官十と六人が、騷げ〳〵で麴屋二階場裡自暴酒の巷と化した翌くるあしたは一天陰に搔き曇り朔風習々として至り、そゞろに樗牛の所謂『泣きべそ詩人』の怨靈また茲に到れるかと想はざるを得なかつた。大きな聲では申されぬ事ながら今日も吉例によつて記者連隨分と大殿籠り過ぐさせ給ふたので、大車輪で急行朝餉の膳に向うて居たら、既に屋外では俄造りの愛々たる戰士の隊伍堂々足並揃へて勇ましくも戰場さして繰出して居た。聽てスタコラ追掛けて見たものゝ中々追付き相にもなし、非戰鬪員が戰鬪員と第一行動を共に仕樣なゞ謀叛氣

を起すのが抑々の誤り、有智無知相距る三十六里は昔からのた定まり、と妙な處に非常特別を楯にとつて太平氣樂な世は水城まで汽働車で一と走り、尤も之れなむ敢て正當也とは認めない迄も事情已むを得ざりしものと認めたからである。

車をすてゝ田越ゐ畑越ゐ谿越ゐ川越ゐ辛と本隊（南軍）に合する。やれ安心と思ふ間もなく此時遲し朝空かすかに轟く砲聲一發、時正に九時五分也。北筑の原野茲に倏ち修羅場の幕は切つて落されんとす。

『北軍の參謀はどうしたんだい。間違つても今頃此處なんかに前進してゐられる氣遣ひはないんだ。』

白木原の村端れに古賀、合田の南軍參謀が鳩首凝議して時刻尙早を主張しても先樣は一向に構ひなしにどし〳〵進軍する。今日は餘程非常特別がはやるらしい。

議一決、南軍亦進む。サア遭遇戰は始まつた。砲聲天に轟き硝煙地に漲る、時に竹筒の大砲轟然白煙を迸らして放發するあり。暫くは兩軍互に鎬を削りこゝを先途と奮戰最も力む。軈て機正に熟したりと見たか、南軍中心を左翼に進め川を渡つて一氣に北軍の麾下を突破せんとする。記者はとある橋の欄干に凭れ乍ら當年の川中島の活劇を髣髴して想は遠く三百五十有餘年の其昔に超越してゐた矢先、俄かにどつとどよめく鯨波の聲、何事ぞと顧れば之りやいさぎ、劍突鐵砲決死の形相物々しく南北の兩支隊は此處なむ橋梁上にて白兵戰をたつ始めようとしてゐる所だ。主觀から觀察したならば眞劍でもあつたらう。客觀から出發した吾々には何だか時代物の芝居でも見てる樣な氣持ちがした。

旗鼓や干戈よりか三寸の口の方が通用するのか樽俎折衝押問答の末は、この白兵戰目出度く北軍の完全にして且つ十分なる捷利と定まり、勝ち誇つた若武者躍進一番渡江測面より直ちに敵の中堅を衝かんとす。敵もさるもの何を小癪など防戰甚だ力め雨到らんか風來らんか戰鬪は正に灼熱の極に達し殺氣四邊を罩めて勝敗の數未だ遽かに逆睹すべくもあらなかつた。最後！最後！愈々最後の突擊に移らんとするや此時休戰の喇叭は嘹喨として鳴り響き暗雲茲に收まり平和の光は充ち滿ちた。時に十時三十分。

統監の講評終つて軍は雜餉隈の驛舍を過ぎ途上小憩

晝餐をしたゝめる。再び北上長驅目指す所は福陵の彼方だ。記者は『種もやある。』と知らぬ顔の權兵衛で職員連中の尻に附着して同行する。夫れとさとつた一行は一齊に今が今迄の烏の行水を中止する。一切知らぬ存ぜぬで押通さうとなさる。どゞのつまりは定まりの妥協とやらに鳧かついた。

二時三十分博多入城、簞食壺漿して熱烈な歡迎の誠を盡して下さつた市當局、生徒父兄、修猷館其他の方々には何と云つて謝辭を申上げて宜いやら。實の所我々五高生位な身分に取つてはあれ丈けの歡待は少々分に過ぎる樣に私は思ふ。所謂『未來の大政治家、未來の大學者、未來の大工業家、未來の刀圭界の明星。』を以て自任する吾校の生徒殊に新入生に於ては多分『石は白三筋』の感を深うしたであらう。然し乍ら吾人は茲に一寸內省するの必要に迫られる。曰く、我が五高生は果してあれ丈けの大歡迎を受くべき十分なる資格を有してゐるであらうか。私は最近にいて頻々として勃發した一種の現象を目睹して特に此の疑問に逢着せざるを得ない。

縣廳裏手、あの大廣場での歡迎會が終つて各部隊はたのがじゝ宿營に征衣の塵を拂ふ。陰鬱で見込もあまりなさ相であつた空模樣は夜に入つて遂に車軸の豪雨となり、折角樂しみのプログラムに組ませてゐた袖ケ濱邊の幽趣も何もかも臺なしにすべく餘儀なくさせられた。明日はた歸りかた名殘り惜しい。健兒の夢は知らず何處にさ迷うたであらう。

第四日（十一月十四日）福岡ー熊本

夜來の雨名殘りなく歇む。行軍四日の期間にあつて no rain を持つたのは全く未曾有の事實だ、なぞゝ得意がつてる一團もある。午後零時二十分、人々は、南走の特別列車に意氣揚々として搭乘目出度く凱旋の途に就く三軍の勇士を博多驛のプラットフォームに於て最後に印象した。別仕立と云ひ條其實鈍い事れ話しにならず、漸く上熊本に着いた時は早やゐ時過ぐる三十分、釣瓶落しの秋の日は武夫原を發見した前に既に業に夜の支配に委してゐた。三唱の萬歲も勤儉貯蓄して無事解隊、かくて龍南の天地秋は益々靜かなり。（三郎）